

おじいさんに魔法をかけてもらってから数日後。

— 検査室 —

「今日は大切な検査をするぞ」

「あの・・・提督、検査はよろしいのですが・・・、

この格好は一体・・・？」

当然の疑問を口に、する高雄。

「新しいおまじくをいじって」





「……何をおっしやっつているのですか?」

怪訝そうな表情で、

至極真つ当な質問をぶつけてくる。

「いやその……」

検査でね?

体内のね? 物質を調べないとね?」

しどろもどろになりながらも、

なんとか説得しようとする。





「……」

「……」

「……はあ……そうですか」

「ゴミムシを見るような目になった。」

「必要なことなんだよ！本当に！」

「はあ……そうですか」

（じいさん……魔法効いてないんじゃない？）





「……」

「……」

「……まあ……それなら

しょうがないですよね……」

「わかりました」

（おおお！）

完全に目の光を

失ったままではあるが、

了承してくれたようだ。

高雄は、下腹部に力を入れ始めた。

「気持ち悪いので、

あまり見ないでもらえますか？」





「あ……あ……」

ちよろちよろ……。  
高雄の口から吐息が漏れたかと思うとど  
下の方から念願の黄金水が出始めた。  
（おおお、じいさんありがとう！）  
おしっこは徐々に勢いを増していく。





じよろじよろじよぼじよぼじよぼじよぼじよぼじよ。

「すごいたくさん出ているな……」  
溢れ出るおしっここと  
底に溜まった液体にぶつかる音、  
否が応でもその量を認識してしまおう。  
それは高雄も同じようだ。





顔を真っ赤にし、こちらを睨みながら叫ぶ。

「見ないでください！」

聞かないでくださいと！」

言ったはずですよ！」

余程恥ずかしいのであろう、  
普段は凛とした態度の高雄が、  
涙を浮かべながら叫んでいる。  
だが、だからこそ見たいのである。





「必要なことだから！  
提督としての義務なんだよ！」

「……っ！」  
排尿行為を終えても、  
まだ睨み続けてくる高雄。

「もう……終わりですわね！」

「ご立腹である。  
それでも見せてくれた、  
じいさんの魔法は本物だった。」





「これはなんですか？」

椅子に手足を縛られ、拘束された高雄が睨みつける。

「追加検査だな」



「……」

「……」

「まさかまた……」

何かを察していたただけだったようだ。



「……はい」  
途端にまた蔑んだ瞳で見つめられる。

「……本当に、  
必要なことなんですかね？」

「！」

「そう！必要なことだ！」

「……わかりました、  
でも急に言われても出せませんわ」

最後の抵抗をする高雄。

「大丈夫だ！手伝おう！」





ずぶっ。

「ぎゃあ！」

膀胱を裏から刺激して、おしっこを出させる作戦である。ぐちゅぐちゅぐちゅ。

「んっ……やあ……！」

「はあん！あ……あ……」

（思ったよりすんなりと受け入れたな？）  
息を荒げ、わずかに腰を振り始める高雄。

（……感じているのか……）





「出ます！」

同時に、高雄のおま○こから、おしっこが吹き出した。

「やっ……いやあ！」

(もう少し続けるか)

ぐちよぐちゆぐちゆ……。  
アナルに入れた指を優しく動かし続ける。

「ひぐう……はあ、はあ……  
来てしまいますう！」





高雄の腰が跳ねたと思ったら、  
急激におしつこの勢いが増した。

「やあ……見ないで……  
見ないで……見ないで……  
見ないで……見ないで……  
見ないで……見ないで……」

途切れ途切れな言葉とは逆に、  
激しく腰が跳ねる。  
強烈な羞恥心と放尿の快感、  
アナルへの性感が高雄を襲っているようだ。





ぬぽん！

「ひやあああ！」

指を抜いた途端、今日一番の大声と共に、  
激しく腰を跳ねさせる高雄。

「あ……ああ……」

その衝撃で、残りのおしっこを  
全て吹き出した。





「はあ……はあ……」  
肩で息をしながら、  
上気した顔でこちらをみつめる高雄。  
不慣れた快感に、どうしていいか  
わからなくなっているようだ。

そして。

「……もっとお……」  
絞り出した答えが、おねだりだった。





「！」  
ふと我に返った高雄は、  
自分の発言を訂正しようとする。  
「今のは違いま……」  
じゅぶう。



「あぐううう！」  
言い切る前に再び指を入れてしまった。  
「あっあ！あ！んん！」  
抵抗なく受け入れ、感じ始める高雄。



ぶしゅあああ！

「やあ！また出てます！」

無意識に望んだ快感に耐えきれず、  
再びおしっこを噴き出した。  
「見てていいのか？」

「はい！見てください！  
お願い致します！」

すっかり見られる快感に溺れたようだ。





—仮眠室—

検査（という名目のおしっこ鑑賞）から数日後、  
仮眠室を覗くと気持ちよさそうに眠る  
高雄の姿がそこにあった。

「すー……すー……」

静かな寝息。

自然と視線は

股間へと移った。

（また見たいなあ）





「ん・ん・ん」

（おっと起こしたかな？）

そうではなかった。

股間をもじもじしている。

（これは・・・）

うっひょうまさか

おもらしするのいや

何かあってはいけない。

私はそっと高雄の

膝を広げた。





(ついでにスカートも脱がせるか)

「んゝ・・・むにゃあ」

少しばかりの下半身の開放感からか、  
緩んだ吐息を漏らす。

(素晴らしい眺めだ)

うむ、  
と鑑賞していると





じよわあ……。  
静かにお漏らしを始めた。

「んっ……」  
吐息混じりに少しずつ  
流れ出していく。





「提督……見たかったんですよね？」

嬉しそうに笑みを浮かべた高橋。

（私の夢を見ているのか……？）

「いいですよお……」

もっと……」

見せて

あげちゃいます」





溜まっていたのだから。  
勢いを増したおしっこは、  
ぐんぐんとシミを拡大していく。

「ふふふふ……  
どうですか……？」

(最高だ！)

夢の中の私に  
代わって応える。





「ふう〜。〜。」

誇らしげに、高雄はその行為を終えた。  
湿ったシーツの冷たさに違和感を覚えたのか、  
頻繁に腰を浮かせ始める。

「ん。〜。？」

あれ。〜。？」

そして夢の世界から  
戻った高雄は、  
現実の私と  
目を合わせる。





「……おはよう」

「……おはようございます」

脳の活性化による現状把握と共に、  
みるみるうちに高尾の  
顔が赤く染まっっていく。

「……違っんです」

唐突な否定。





「……違うんです！」

涙を浮かべながら、否定を続ける。

「大丈夫大丈夫」

そんな高雄をなだめるように、

優しく頭を撫でる。

「……」

「……」

「気持ちよかった

んだな？」





「違います!・・・違わないですけど、

・・・いえ違います!」

見られていた羞恥による興奮に、

戸惑っているようだ。

(もう少し苛めたい

ところではあるが、

また今度にしよう)

「誰も来ないうちに

片付けるぞ」

「・・・はい」

べそをかきながら、

ゆっくりと高雄は

起き上がった。





—数ヶ月後—

「今日は……ここでお願いします」  
検査室から始まり、  
様々な場所で行われたおしっこ観賞。  
すっかりのめり込んでしまった  
高雄の希望で、  
遂には外で行われることになった。

「提督……ご覧いただけますか？」

「……今日ずっとそわそわしていたのは、  
これを期待していたのか？」





「は……はい！  
申し訳ありません……  
はしたなくて……」  
責めたつもりは無いのだが、  
問いに反応して少し感じている……。

「今日は変わった趣向も試してみよう」





「変わった趣向ですか？」  
急にテンションが上がる高雄。  
「このまま私は見続けるが、  
大事なところを隠したまま  
おしっこをするんだ」

「わかりましたわ！  
それでは早速……」





「ご覧……ください……」

つーっと金色の雫が垂れる。

普段はしつかりとした高雄が、

笑顔で放尿を見せてくれるように

なるとは……。

(じいさんありがとう……)





排泄による快感に浸る高雄。

「ん・ん・んう・ん・ん」

「はあ・あ・あっ・あ・あ」

「気持ちよさそうだな」

「はい・ん・ん・ん」





「ご覧いただけれますか？」

上気した顔でこちらを見上げてくる。

「ああ」

「ありがとうございます……」

「はあ……はあ……っ」

見られているのに

大事な場所は見られていない、

そんなもどかしさが、いつもとは

違う興奮と性感をもたらしめている。





「はあ……はあ……」

途切れた吐息と、

ぴちよん……という音が

排泄の終わりを告げる。

高尾の足元には、

土に吸収されきっていない尿が

小さな水たまりを作っている。

「ありが……とう……、  
ごぞいまし……た……」





「まだ終わりにじゃないぞ」

「え？」

高雄は、きよとんとした表情でこちらを見つめる。

「今度は、しっかりおま○こを見せてするんだ」

「ちゃんとお外でできたご褒美だ」

「で、ですが、」

もう出せませんわ……」





「大丈夫、高雄は気持ちいいの好きだろ」  
「は……はい！」  
「どうなったたら気持ちいい？」  
「提督に……提督に見られながら  
おしっこすると気持ちいいです！」

すっかり従順になった高雄は  
指でおま○こを開きながら、  
力を込め始めた。







「……出ます！」

「見て！見てくださいー！」

「ゆっくりと垂れ始める2度めのおしり。」

「はあ……あっ……！」



二度目とは思えないほど、  
勢いを増して流れ出るおしっこ。

「気持ちいい……！  
提督に見られながらするおしっこ、  
気持ちいいです……！」

「はあっ……ひぐう……」

肩で息をし、よだれを垂らしながら  
こちらを見上げる。





二度目のおしっこを終えた高雄の足は、  
がくがくと震えていた。

もはや高雄にとっては、オナニーと大差ない。

「あ……あひがとお……」

「ござあ……いましたあ……」

呂律も回っていない。

「また……、  
次もおねがい……します」

